

西洋古代史研究の「貢献」について

南川高志

本報告書『西洋古代史研究』の創刊号が出たのは2001年の3月のことである。今号で第20号となった。21世紀も20年目となり、はや新世紀もその5分の1の年月が過ぎたことになる。この間、本報告書の役割はともかくとして、日本における西洋の古代に関する情報の増加には目を見張るものがあると私は感じている。話を広げすぎないために、私の専門であるローマ史に限定して、ごく簡単に回顧してみたい。

20世紀最後の年に映画『グラディエーター』が公開されて日本でも話題になったが、その後、和製のローマ史劇『テルマエ・ロマエ』が2作、制作・上映された。その基になったヤマザキマリさんの原作漫画は大いに読まれ、続編『プリニウス』も刊行されている。漫画には他に、さかもと未明『マンガ・ローマ帝国の歴史』3巻がローマ宗教史専門家の小堀啓子さんの監修で刊行された。2006年に最終巻が出された塩野七生『ローマ人の物語』は、とくにビジネスマンに読まれたと聞く。『図解 古代ローマ人の日常生活』（洋泉社MOOK）や『図説 激闘ローマ戦記』（学研 歴史群像シリーズ特別編集）のような一般情報誌での特集も出ている。風変わりな作品、マルクス・シドニウス・ファルクス（ジェリー・トナー解説、橘明美訳）『奴隷のしつけ方』がよく読まれ、歴史小説であるヴァレリオ・マンフレディ（二宮馨訳）『カエサルの魔剣』や推理小説のダニエーラ・コマストリ＝モンタナーリ（天野泰明訳）『剣闘士に薔薇を』も一般読者にローマ史の面白さを提供した。テレビ番組だけでなくインターネットを通じてローマ遺跡の情報を得ることが容易になり、日本人観光客がローマ時代の遺跡を訪れる旅も飛躍的に増えた。クロアチアやトルコなど、西ヨーロッパ以外の珍しい場所にある遺跡へも、一般旅行者が観光するようになった。

こうした情報の増加と同様に、この20年ほどの間の日本の学界における西洋古代に関する研究も大いに進展し、研究者が著したり関わったりした出版物が増えたのは喜ばしいことである。

まず、ローマ時代に書かれた文学作品が数多く翻訳され、出版されたことが挙げられる。私は、1999年にギリシア・ローマ時代の歴史書の紹介文を書き、そこに日本語訳の有無を書き添えたが（京都大学学術出版会編『西洋古典叢書がわかる』）、

2017年にその改訂版を書いたとき（『西洋古典叢書がわかる リターンズ』）、日本語訳が増えたことを改めて実感した。ポリュビオス、リウィウス、ウェレイユス・パテルクルス、ヒストリア・アウグスタ（ローマ皇帝群像）、アンミアヌス・マルケリヌスの本邦初訳が出版された。カエサルの諸作品とプルタルコス『英雄伝』、サルスティウスの史書には新訳が刊行された。ローマ史研究に欠かせないキケロやセネカの諸作品、プルタルコス『モラリア』、ゲッリウス『アッティカの夜』、パウサニアス『ギリシア案内記』、クインティリアヌス『弁論家の教育』、そしてリバニオス『書簡集』など、関係史料の邦訳刊行は枚挙にいとまがない。書物の形での発表はまだであるが、エウトロピウス、アウレリウス・ウィクトルの史書の訳も学会誌上で発表されている。ローマ史研究に深く関係するスエトニウス『文法家・修辭家列伝』、テミスティオスやオータンのエウメニウスの演説などの訳も刊行された。壮大な計画である『テオドシウス法典』の訳注の刊行も継続している。

これらの翻訳の刊行に当たっては、西洋古典文学研究者や古代哲学の専門家にも非常に多くを負っている。また、訳者のご苦労はもちろんのことであるが、出版社の理解と協力も特記すべきであろう。私は、西洋古典叢書（京都大学学術出版会）の編集委員の一人として邦訳刊行を推進する立場にあるが、かつて年長のローマ史研究者から、そんなに日本語訳を出すと学生・院生がギリシア語もラテン語も勉強しなくなってしまうよと皮肉を言われたことがある。しかし、古代の文学作品を日本語で読めるようにすることは、西洋古典の素晴らしさを広く伝えるだけでなく、西洋古典学・西洋古代史研究という学問の意義を日本の多くの方々に理解してもらうためにも重要だと私は考えている。これからも翻訳をお願いする作業を進めたいので、どうか研究者の皆さんには、翻訳の依頼があったときには仕事を断らず、ぜひお引き受けいただきたい。

古代の文学作品と並んで、海外の歴史書も数多く日本語訳された。テオドール・モムゼンの『ローマ史』、ヤコブ・ブルクハルトの『コンスタンティヌス大帝の時代』、マティアス・ゲルツァーの政治家伝、ミハイル・ロストフツェフ『ローマ帝国社会経済史』、ロナルド・サイムの『ローマ革命』、H.I. マルーの『アウグスティヌスと古代教養の終焉』など、古典と呼んでよい、しかも大部な歴史書が日本語で読めるようになったのは、研究者にとっても非常にありがたいことである。古典的歴史書だけでなく、ごく最近の歴史書も数多く日本語訳を得た。近年では、とくに白水社が刊行するローマ皇帝シリーズやローマ帝国関係書目、文庫クセジュのローマものの数々が、多くの知見をわかりやすい形で提供してくれている。ローマ史と密な関係にある「古代末期」についてのピーター・ブラウンの諸研究が翻訳されたことも貴重であった。

さらに、日本人研究者の著作の刊行も盛んになされた。啓蒙書の類いや大家の論

文集の出版も意義深いが、課程博士学位論文を改訂した単行書の刊行が増えたことをとくに喜ぶたい。

以上はごく粗い回顧であるため、紹介すべき作品や言及すべき業績がまだまだあるかもしれない。しかし、このような自画自賛と勘違いされるかもしれない回顧で満足してはならないだろう。反省すべき点も数多いとのご指摘もあろう。そもそも冒頭に述べた日本におけるローマの情報の増加やその活用は、日本の学界におけるローマ史研究の進展や出版と連動しているのかと問われるかもしれない。日本人研究者の努力の成果が一般のローマに関する知見や興味の増加に反映し、研究者は社会に貢献したと信じたいのであるが、実際はどうであろうか。

歴史学の研究者の社会貢献としてよくあげられる事柄には、啓蒙書や高校教科書の執筆、民間のカルチャー講座での講義や高大連携事業の高校生向け授業などがある。こうしたことは私も経験してきているが、それ以外に社会に対する直接的な「貢献」で何をしたかと問われると、あまり自信がない。絞り出しても、次の4つのことを思い浮かべるくらいだろうか。

まず一つ目は、映画『グラディエーター』に関わるコメント記事を新聞紙上に書いたことである（2001年4月19日 京都新聞第15面掲載）。CGを使って迫力満点の映画であったと書いたら、後日私の記事を読んだ同じ大学の教授から、あの映画はリドリ・スコットの作品の中で一番駄作なのに先生はなぜ褒めたのか、と叱られた。

二つ目は、拙書『ローマ五賢帝』に掲載されている最盛期のローマ帝国の地図を、映画制作会社から『テルマエ・ロマエ』のために使わせてほしいという希望が出版社に寄せられ、これを許諾したことである。公開後すぐに映画を見に行ったが、私の本の地図がどこに使われているのか全然わからなかった。

三つ目は、小学生から高校生までの生徒たちを読者と想定した学習漫画の監修をしたことである（小学館学習まんが『世界の歴史3 ローマ』）。編集部から送られてくる台詞と解説、そして図像をみてチェックする作業が主であった。确实視されている史実や史料の記述があるような台詞や図像についてはすぐチェックができるが、漫画に描かれた町の情景や登場人物の表情など、正確かどうか判断ができないことが実に多かった。多くの生徒たちが読む可能性を考えると私は無責任ではいけないと感じて、非常に細かく見、うるさく修正を指示したので、おそらく出版社の編集スタッフは閉口しただろうと思う。本の出来映えや売れ行きは知らないが、この作業を通じて、私は自分自身が古代ローマ人の生活と生涯のいったいどれだけを知っているのか、非常に不安になった。

そして、四つ目は、所属大学と大手電機メーカーとが行っている共同研究の1企

画のために、インタビューなど多少の対応をしたことである。「2050年の世界」はどうなっているかを考えるプロジェクトで、そのために2000年前の研究をしている歴史学者に話を聞くという珍妙な企画であった。私は面白いと思ってインタビューに2度応じた。実は、これは私の『新・ローマ帝国衰亡史』に書かれている古代終焉期の様相があまりに現代世界と似ているという共同研究スタッフの読後感から行われたものであった。しかし、私は最初から「歴史家は占い師ではありませんから」と言って、インタビューする側の期待に沿うような話をしなかったため、結局あまり役には立てなかっただろう（インタビューの記事は、次のところに掲載されている。日立京大ラボ編『BEYOND SMART LIFE 好奇心が躍動する社会』（日本経済新聞出版、2020年8月刊））。

以上、4つとも、とても「貢献」したとはいえないだろう。もっとも、西洋古代史だけでなく人文学全体がすぐに役に立つような性格の学問ではないので、一般社会への直接的な貢献は容易でないし、また貢献できるものとして自らの学問を明示することも簡単ではない。しかし、世の中には人文学の役割のわかりやすい説明と、一定の期間での成果を要求する方々も大勢おられるので、たいへんやっかいな事態となっている。こうした事態の深刻化も、この20年間の忘れることができない事柄といってよいだろう。

長らく厳しい視線が注がれてきた人文学であるが、近年その意義の重要性に少しは気がつかれるようになってきたのでは、と感じることがある。例えば、これまで「人文科学」を対象から外していた科学技術基本法について、その一部が改正され「人文科学」を加えることが決まり、令和3年4月1日から施行される（第2条第1項に「人文科学のみに係る科学技術」を追加）。ただ、これは急速に発展しているAIやIoTなど科学技術・イノベーションと人間や社会の在り方が密接不可分な関係となっているので、人文科学を含む科学技術の振興とイノベーション創出の振興を一体的に図っていくため、という措置である。従って、人文学が主になる扱いではない。むしろ、人文学を利用しようという姿勢である。医学や自然諸科学の大型プロジェクトに哲学や生命倫理等の研究者が加わるようになってきているが、アリの的に利用されるのではなく、主体的に人文学の真価が発揮されることを願わずにはおられない。

私は、人文学が社会へ貢献できることは今後ますます多くなるとみている。例えば、現在の大問題である新型コロナウイルス感染症拡大についても、まずは克服のために医学による治療と予防の方法が開発されることが期待されるが、この感染症のために引き起こされた社会生活面での問題は、人間の価値観、人生観、幸福観などあらゆる面に及んでいて、人の心、自然との共生のあり方など、人文学が研究課

題とする問題にも重大な関わりを持っているからである。

話を西洋古代史研究に戻そう。西洋古代史研究と社会とを結ぶ重要な回路に、高等学校の世界史教育があるが、教育課程の変更から世界史の教科書はその分量の削減を求められている。とくに古代史や中世史は、新しい時代よりも多めに削減しなければならなくなった。私が古代史部分を執筆している教科書は、他の教科書に比べて非常に分厚く詳しいものだが、3割は削減しなければならず、何を残し何を削除するか、執筆者にとっては頭が痛いところである。また、教科書の変化とも関係するが、これまで当たり前であった「ギリシア・ローマ史」という枠組みも今後存続するかどうかかわからないと感じている。教科書や歴史書籍で、古代ギリシア史は古代オリエント史と一緒に、ローマ史は古代の西アジア史（パルティア・ササン朝）と一緒に論じるような枠組みが増えつつあるからである。この方向で進めば、「地中海世界」「古典文明」という表現や考え方はいずれ消滅していくかもしれない。これについては評価が分かれるだろう。ヨーロッパ中心史観批判が効果を上げたと受け取る向きもあれば、古代ギリシアとローマが世界史上において果たした意義を正確に理解していないと批判する方もおられよう。

こうした事態を念頭にすれば、西洋古代史研究は今後どうあるべきか、普段は専門分野の研究に潜みつつも、研究者は何らかの対応を考える必要がある。少なくとも、研究活動や著作の発表において、西洋古代史研究者が20世紀の学界と同じことをしていたのでは十分ではないことは明らかであろう。史料と研究書を調べる前に何を問題にするかよくよく考えねばならないし、論著の公刊の際には、誰に何を伝え、どのような意義や波及効果を想定しているのか確認する必要がある。上述の20年間の回顧の際に日本人研究者の著作の紹介をごく簡単に済ませてしまったのは、自らの活動も含めて、こうした点について十分であったか自信が持てなかったからである。

長らく人文学はAIにはできないことを行うのだと主張してきたが、いまやAIと連携する人文学が推進されている。西洋古代史研究にも、これまでにない研究や全く新しい発想が研究活動を別の次元へと動かしてくれるかもしれない。しかし、地に足が着かない、ただ流行に乗るだけの研究はすぐに賞味期限が切れてしまうだろう。

課題を述べ立てるだけで終わり、何も新しいことを実行できなかった私としては、反省ばかりである。今後、西洋古代史の専門家の皆さんが、先学の努力と研究蓄積を活かしつつ、学界にも一般社会にも真に有意義な研究を推進してくれることを期待したい。